

各地で話題の病害虫

クロマルコガネ

学名: *Alissonotum pauper* (Burmeister)

1996年10月鹿児島県沖永良部島で夏植えサトウキビの発芽茎(地下部)を加害している本種の成虫が発見された。

本種は、カブトムシ亜科のクロマルコガネ族に分類される。また、この族はカブトムシ亜科最大の族で、寒冷地を除く全世界に広く分布し、世界中で約500種が知られている。

本種は台湾、中国、フィリピン、インドシナ半島等での記録があり、国内ではトカラ列島の宝島



鹿児島県農業試験場 山口卓宏氏提供

における採集例が知られていた。

成虫は黒色で光沢がある。体長12~16mm。

台湾では、サトウキビにおける被害の報告例があり、それによると幼虫・成虫ともにサトウキビの根や地下茎部を食害し、枯死あるいは衰弱させることがある。成虫はサトウキビ苗の芽や表皮を食害し不発芽の原因となることがある。寄主植物としては、サトウキビのほかにススキ、チガヤ等がある。

国内における発生生態等については現在調査中である。防除法については台湾での生態等を考慮し、アオドウガネの防除基準に準じた防除のほかハリガネムシとの同時防除としてカルボスルファン粒剤等が効果的である。

リーキ及びニンニクの黒斑病(仮称)

学名: *Alternaria porri* (Ellis) Ciferri

1993年、宮城県大河原町でニンニク(品種:ホワイト六片)の葉、葉鞘及び花梗に紫色~黒色の斑紋を生じる病害が発生した。また、リーキ(別名西洋ネギ、ポロネギ)でも同様の病害が1995年以来確認されていた。1997年宮城県園芸試験場等の調査により両病害とも *Alternaria porri* によるものと判明した。

病徴は、リーキ及びニンニクともに初め葉及び葉鞘部に白色で5mm前後の小斑点を生じ、後に淡



リーキ病徴

ニンニク病徴

宮城県園芸試験場 菅野博英氏提供

紫色~暗紫色の大型で長楕円形~紡錘形の病斑(約30~50×15~25mm)となる。病斑部には同心輪紋状に黒褐色のカビが生じる。病勢が進むと、リ病葉は病斑部から折損し、病葉全体が白色~淡褐色に変色し枯死する。

本病の発生は主に梅雨時期に多く、葉の基部や花梗にも発生して株全体を枯死させることもある。

本菌は、接種試験によりリーキ、ニンニク、ネギ及びタマネギに病原性を示すことが確認されている。また、生育適温は、25~28℃である。

防除薬剤は調査段階であるが、リーキに対するイミノクタジン酢酸塩・ポリオキシ水和剤、イプロジオン水和剤等に効果が認められている。